

魏志倭人伝(1)

山下 浩

第一章 邪馬台国への旅

『魏志倭人伝』の前半は、魏の朝鮮半島に設けられた地方組織、帯方郡から女王国の都、邪馬壹国までの旅程が記されている。一文ずつ読み下すことによって、弥生時代中期から後期にかけての倭国の状況を明らかにしていきたい。そのために、遺跡の状況等とも必要に応じて照合して行く。

原文「倭人在帯方東南大海之中、依山島爲國邑。舊百餘國、漢時有朝見者。今使譯所通三十國」

訳「倭人は帯方郡の東南の大海の中に在り、山島に依って^{こくゆう}国邑とし、^{もと}旧は百余国あった。漢の頃から大陸への朝貢があり、今では三十カ国が使者を通わせている。」

倭人は自分たちの国名を「わ」と言った。「わ」は大和言葉として現在に至っており、例えば、和文、和食、和風、和式、和服、和紙、和楽器、英和辞典、漢和辞典など一字で日本を表すときに使われている。ただ、「わ」は大和言葉であるにもかかわらず、後の時代の日本人が漢字で書くときに音読みで「わ」と読む「和」を充てたため「わ」が大和言葉だと思われなくなった。「わ」は「和」の音読みであり訓読みでもある。以後、原文を引用するときなどを除いて、倭国は和国に、倭人は和人と表記する。

和人の国は帯方郡の東南の大海の中にあり、山島に依って国とし、旧は百余国あった。なお、この記述は、後漢(25—220年)の初頭に班固が書いた『漢書』地理志の「樂浪海中有倭人 分爲百餘國 以歲時來獻見云」を引用して書いているものと思われ、それより250年くらい後に書かれた『魏志倭人伝』の編者がそれらの国々を具体的に知っていたわけではなからう。

漢の頃から大陸への朝貢があり、30カ国が帯方郡に使者を通わせている。『魏志倭人伝』記述の資料については、先走ってしまうが、『魏志倭人伝』の最後が魏の張政らが正始8(247)年に和国に派遣され、その数年後に彼らが帰国したところで終わっているのだが、その往復の旅程が魏にとって最新のものであり、記述についてもその時のものだろう。また、『魏志倭人伝』の資料となったその紀行文は、数年間の日本滞在中に記されたものが中心になっており、「倭人伝」は古くからの言い伝えや根拠の乏しい記事、意図してなされた改竄が含まれているものの、非常によく女王国の状況を観察して書かれており、これほどの内容のものは『三国志』の中でも異色である。

『魏志倭人伝』は、中国の歴史書『三国志』中の「魏書」第三十卷烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称であり、当時、日本列島にいた住民の倭人の習俗や地理などについて書かれている。著者は西晋の陳寿で、三世紀末(280(呉の滅亡)~297(陳寿の没年)の間)に書かれた。

「使者を通わせている」30カ国とはどこなのか、具体的なことがわからない。邪馬台国が含まれるのは当然として、その他の国々についてわかれば、当時の列島諸国の力関係、対立の構図など面白い研究テーマがいろいろと出てくるだろう。なお、女王国の構成国として、このあと30カ国があげられており、研究者の中にはそれらの国々がこの30カ国だとしている人がいるが、私は偶然の一致で、無関係だと判断している。なぜなら、これについても先走ってしまうが、これらのうち29カ国は女王国を構成する国々の一部で全部ではなく、いわば都道府県のような地方組織で、独立して大陸諸国と外交折衝を行う権限を持っていたとは思えないからである。

当時、和国は女王国が最大の勢力であったが、それ以外にも30カ国内外の国があり、後漢の時代、紀元1世紀に百余国と、たくさんあった国々が、魏の時代、3世紀には地域ごとに中規模な国々へとしだいに統一されつつあったことが読み取れる。

原文「從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里」

訳「帯方郡から倭国に至るには、海路で海岸を循って韓国を経て南へ、東へ、七千余里で北岸の狗邪韓国^{くやかんこく}に到着する。」

魏の朝鮮半島に設けられた地方拠点である帯方郡から和国に至るには、朝鮮半島の西側、黄海側を海路で海岸に沿って韓国（『三国志』「魏書」東夷伝韓条によると、韓は帯方郡の南にあり、東西は海を境界とし、南は和国と接し、四方は四千里ばかり。韓には三種あり、馬韓、辰韓、弁韓である〈つまり、馬韓、辰韓、弁韓の3国は、北は帯方郡に接し、東西は日本海、黄海と面し、南は和国と接していた〉）、を経て南下し、対馬海峡に出て、東へ行くと七千余里で和国の北端の狗邪韓国に到着する。「和国の北岸の狗邪韓国」とは当時の和国の勢力が対馬海峡を越えて朝鮮半島南部にまで及んでいたことを意味する。また、北岸というのは、九州から船で北上して到達する、和国から見た北の岸、という意味である。和人が支配する国が朝鮮半島南部にあったのだ。

狗邪韓国がどんな国だったのか、女王国に属していたのか、それとも王がいて独立していたのか、和人と現地人がどれくらいの比率で混住していたのかなど、何もわからない。なお、他の史料を探すと、『三国志』魏書弁辰伝の中に「弁辰狗邪國」の名が見られ、これが狗邪韓国を指していると思われる。二つの名前の違いについて考えると、この狗邪国は広い地域で見ると「韓」の一部で、その中の「弁辰」地域にある、と読むことができる。狗邪韓国は後の任那の一部になったとされるが、その後の朝鮮半島南部諸国の盛衰、推移など史料に乏しく詳細はわからない。しかし、狗邪韓国は和国の大陸との橋頭保の役割を負っていた。『三国志』魏書弁辰伝に「弁辰は鉄を産出し、韓人^{わい}、倭人がみなこれを取る」（原文は「國出鐵、韓、濊、倭皆從取之」）と書かれており朝鮮半島南部が和国への鉄の供給地として古代において重要な地域だったことがわかる。その権益は数百年にわたって維持され、6世紀とも7世紀ともいわれる任那日本府が滅亡するまで、その時代ごとの朝鮮半島南部の我が国の権益の確保に、時の権力者たちは注力し続けていくのである。

原文「始度一海千餘里、至對馬國、其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、所居絶島、方可四百餘里。土地山險、多深林、道路如禽鹿徑。有千餘戸。無良田、食海物自活、乗船南北市糶」

訳「始めて海を千余里渡ると、対馬国^{つまこく}に至る。大官は卑狗^{ひく}、副官は卑奴母離^{ひなもり}。絶島で四百余里四方の広さ。千余戸が有る。山は険しく、道は獣道のように、林は深く、良い田畑がなく、海産物で自活。船で南北岸の市へいく。」

始めて対馬海峡を千余里渡ると、対馬^{つま}（のちに「つしま」と呼ばれる）国に至る。大官はひく、副官はひなもりという。「ひく」は他国の大官の名前がそれぞれ異なることから人名と思われるのに対し、「ひなもり」は他国の副官が「ひなもり」であることから役職名と思われる。であれば、これは大和言葉であり、漢字を充てると「鄙守、あるいは鄙人」となる。鄙は、「鄙びた」という言葉があるように、都から離れた所、地方であり、守（または人）は防人同様、軍人である。女王国の地方統治は官僚がトップで軍人が副官に就くという機構であったことが分かる。また、対馬国には王がいない。対馬国は女王国の一地方であった。

さらにもう一つ。

先ほどの「わ」もそうであるが、「ひな」や「もり」という言葉はこの時代、弥生時代後期の3世紀中頃にはすでに和国で使われていたことがわかる。大和言葉としてのこれらの言葉の発生時期が、弥生時代までさかのぼることが『魏志倭人伝』のこの文章から確認できるのだ。

「ひなもり」については、日本各地に地名や神社の名称として一部が残っている。

平安時代中期に作られた辞書である和名抄に、奴国^{かすやぐん}があったとされる筑前国糟屋郡（現在の福岡市）に「夷守^{ひなもり}駅」があり、越後国頸城郡（新潟県上越市ほか）に「夷守郷^{くびきぐん}」が記載され、かつて上越市には美守^{ひだもり}

村が存在した。「延喜兵部式」(923年)には日向国諸郡もろかたぐん(鹿児島県と宮崎県の一部にあった郡)に夷守駅が記されており、現在は宮崎県小林市に細野夷守の地名があり、その南西には夷守岳がある。多くは、「ひなもり」に「夷守」の字が充てられている。鄙守あつみぐんが置かれた地方あかなべだったのであろう。地名ではないが、「延喜式神名帳」には、美濃国厚見郡あつみぐん(現在の岐阜市茜部本郷)に比奈守神社を収めている。「ひなもり」の地名などが現在の福岡県、新潟県、宮崎県、岐阜県に見られるということは、それらの地域が古代には「地方」であったのだらう。「ひなもり」の制度がいつごろまで存在したのかわからないが、女王国のみやこ、あるいは、大和政権の都からみた「地方」だった。(参考資料:ウィキペディア「ヒナモリ」)

対馬国は本土から離れた離島で、四百余里四方の広さで千余戸がある。山は険しく、道は獣道のように、林は深く、良い田畑がなく、漁業で自活している。島内では十分な農産物が採れないので、船で対馬海峡を渡り、九州北部や朝鮮半島南部の市へ行く(「島内の南北岸の市に行く」、という意味ではない)。島の住人は、対馬海峡の兩岸を行き来し、盛んに海路によって物々交換を行っていた。島で採れた海産物を保存が効くように加工して船で運び、米などの農産物を主に得ていたのだらう。考古学の遺跡ではそうした遺物(消費財)は残らず、発掘されないでそうした交易があったことを検証するのは難しい。ただ遺跡から発掘された朝鮮半島由来の土器に見られるように、人々は活発に交易を行っていたし、彼らにとって九州から朝鮮半島南部は一つの経済圏であった。地図を見るとわかることだが、対馬国から南下して九州に渡るのと、北上して朝鮮半島に渡るのとでは、朝鮮半島のほうが近い。何しろ、釜山から50キロしか離れておらず、韓国から対馬は肉眼で見ることができる。現在は対馬と韓国の間に国境があるので、自由な往来はできないが、人々の往来が自由だった当時は、自由な往来、経済活動が行われていた。朝鮮半島南部が鉄の供給地だったことと対馬から鉄素材が出土していることから、対馬国の人々が鉄の搬送を担うことで、半島と北部九州間の仲介貿易のような役割を担い、島の農業生産性の低さをカバーしていた可能性もある。北部九州やこれら島々から朝鮮半島南部に渡り、そのまま定住する者もいたのだらう。また、逆に朝鮮半島から渡って来る人々もいたのだらう。狗邪韓国のような和人の支配する国ができたのもある意味、自然な成り行きだった。

対馬の遺跡の状況

山辺遺跡やんべ

対馬は現在でも海岸線からすぐに山地が迫るとい地形で平地が少なく、対馬市峰町つしまの山辺遺跡やんべで2000年10月に対馬で初めて弥生時代の集落跡が発見されてはいるが、弥生時代の遺跡の発見例が他になく、当時の対馬国の中心地が山辺遺跡やんべだらうと言われているものの確定していない。

山辺遺跡やんべでは、弥生時代前期から古墳時代にかけての住居が検出されているが、その中心は弥生前期で、百以上の柱穴と、竪穴式住居三棟、総柱高床式倉庫が確認されている。出土遺物として、弥生土器に混じって朝鮮半島系の無紋土器、楽浪土器が出土している。また、鉄製釣り針や袋状鉄斧てつぶが見つかり、また、鉄素材が出土していることから鍛冶工房の存在も考えられている。鉄素材も朝鮮半島からもたらされたものであり、対馬と朝鮮半島との古くからの緊密な経済関係が窺える。

(参考資料: <http://www.pref.nagasaki.jp/jiten/index.php/view/139> http://inoues.net/club/wajinden_no_tabi3-4.html)

原文「又南渡一海千餘里、名曰瀚海、至一大國。官亦曰卑狗、副曰卑奴母離。方可三百里。多竹木叢林。有三千許家。差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糶」

訳「又南に瀚海かんかいと呼ばれる海を千余里渡ると一大国に至る。官はまた卑狗ひく、副官は卑奴母離ひなもり。三百余里四方。竹、木、草むら、林が多い。三千許りの家が有る。田畑は有るが田を耕すが食糧には足りず、南北の市へいく。」

また南に瀚海と呼ばれる海を千余里渡るといき国に至る。他の史書では「一支國」とされることから、『魏志倭人伝』は誤記ではないかとされており、対馬との位置関係から考えて私も誤記だと思う。手書き文字だと、「支」の草書体と「大」の隸書体は似た形であり、原文から『魏志倭人伝』の原稿を作成するときに間違えたのだろう（この時代は隸書体と草書体が用いられ、楷書、行書はまだ誕生していない）。いき国は現在の壱岐だが、対馬国からは南東に位置しており、「南に瀚海と呼ばれる海を千余里渡る」は方向がおかしい。王はおらず、官、副官の名前は対馬国と同じだから対馬と壱岐は同一行政圏だったことがわかる。

広さは三百余里四方で三千ばかりの家がある。竹、木、草むら、林が多く未開の土地が多い。田畑はあるが耕地は狭く、食糧には足りず、対馬国と同様に船で対馬海峡を渡り、九州や朝鮮半島南部の市へ行く。壱岐の人々もまた、対馬の人々と同様の経済活動を行っていたのだろう。

壱岐の遺跡の状況

原の辻遺跡

壱岐島の弥生時代の遺跡については、深江田原平野に大規模な環濠集落の原の辻遺跡が発見されており、ここが当時の壱岐の中心地であったのではないかとされている。三重の濠を巡らせた大規模な環濠集落や祭祀建物跡がみつきり、また、濠の外に北西では日本最古の船着き場の跡も発掘された。環濠集落の規模は東西約 350 メートル、南北約 750 メートル、遺跡全体の総面積は 100 ヘクタールにも及ぶ広大なものである。

出土物には大陸系の品が多く、中国鏡、戦国式銅剣、前漢と後漢の間の 15 年間だけ存在した国、新の王莽が鑄造した貨泉などの中国の銭貨、トンボ玉、鑄造製品、無文土器、三韓系土器、楽浪系の土器などが出土した。これらのことから、九州や朝鮮半島との交易品しか見つかっていない対馬と違って、壱岐国は対馬海峡を大きな経済圏として、前漢、後漢など大陸との活発な交易を行っていたことが窺われる。なお、対馬国に中国系の出土物がないということは、中国との交易を行っていなかったということではなく、交易の中心地が壱岐だったことを示している。

また、弥生時代中期の竪穴住居址から炭化した米、麦が出土している。島の河川流域の低地に水田が広がり、水稻農耕が行われていた。

島には貝塚もあり、狩猟獣であるシカ・イノシシのほか、家畜である馬をはじめ獣骨や魚骨が出土している。当時日本列島には馬はまだ渡来していなかった、と言われており、詳細はわからないが、大陸から壱岐にすでに馬が渡来していたのかもしれないし、食肉として半島から馬の部位が運ばれてきたのかもしれない。（参考資料：ウィキペディア「原の辻遺跡」）

これらのことから、役人のトップの卑狗や鄙守らはここに役所を構えていたのではないと思われる。同一行政圏の対馬は面積は広いものの、壱岐に比べ人口が三分の一しかなく、大規模な集落遺跡も見つからないので、政治の中心地は壱岐にあった可能性が高い。対馬には部下の役人を配置していたか、巡回統治をしていたのではなかろうか。

カラカミ遺跡

カラカミ遺跡は、弥生中期から後期にかけての、原の辻遺跡よりも後の壱岐市勝本町にある弥生時代の高地性環濠集落遺跡で、原の辻遺跡から北西約 6 キロメートル、標高 30~90 メートルの山頂や傾斜面の丘陵地にある。弥生時代末期から古墳時代初期には廃棄された。片苗湾の近くにあり、舟で行き来をしていたと考えられる。漁労や狩猟が盛んで、獣の骨（イヌ、イノシシ、シカ、ウマ、アシカ、クジラ、シャチ、イルカ、ドブネズミ等）や鳥の骨、魚の骨も多く見つかり、たくさんの漁業関係の遺物も発見された。

石器類は少なく、あっても、極めて簡単な凹石または鼓石がわずかに他の遺物に混じっているばかりだが、鉄器類がたくさん発見されており、鉄器中心の遺跡だったことが分かる。銚、釣り針、鎌、鉄鏃、槍鉋、刀子などの鉄器が出土している。さらに、鉄を加工したり生産したりするための地上炉や鉄片も見つかった。

また出土土器のうちには、「周」の刻字を有する弥生時代後期の土器片があり、漢字が記された土器としては国内最古級とされる。朝鮮半島の三韓土器や楽浪郡古墓で発見される漢式土器も発見された。

(参考資料 : <http://www.ikishi.sakura.ne.jp/ikikarakamiiseki.html>)

カラカミ遺跡の製鉄は我が国で最も古いもので、弥生時代後期に始まったとされており、鉄の朝鮮半島からの輸入の中継地の役割から鉄器の生産地へと壱岐は発展していったのだろう。しかし、弥生時代末期から古墳時代初期には廃棄された。おそらく、ヤマト王権の成立により古墳時代前期に朝鮮半島からの物資の輸入の経路が東寄りに変わって、世界遺産になった沖ノ島付近を経由するようになり、そこから近畿へ直行する経路など新しい物流網ができたからではなかろうか。

原文「又渡一海千餘里、至末廬國。有四千餘戸、濱山海居。草木茂盛、行不見前人。好捕魚鮫、水無深淺、皆沈没取之」

訳「また海を千余里渡ると、末廬^{まつら}國に至る。四千余戸が有り、山海に沿って住む。草木が茂り、前を行く人が見えない。魚やアワビを捕るのを好み、皆が潜る。」

また海を千余里渡ると、九州に上陸し、まつら国に至る。ここまで和国の地名の漢字表記は一音一字であったが、「まつ」に「末」一字を充てている。和人の発音が「末」の音と似ていたか、字数を減らそうとしたのかどちらかだろう。

まつら国の記事には「官は〇〇、副は〇〇」の紹介文がない。四千余戸が有り、山海に沿って住む、と書かれていて、対馬や壱岐を除く周辺国に比べて人口が少ない。陸路は整備されておらず、草木が茂り、前を行く人が見えない。漁業が主産業で魚やアワビを捕るのを好み、皆が潜る。

漁業の方法が、釣りや網によるものでなく、水に潜り、鉈^{もり}やヤスで魚を突いたり、アワビなどの貝類を採取することが主流だった。釣り針は縄文時代の遺跡からも発掘されており、この時代にも壱岐などで利用されていたが、小さな釣り針、細く丈夫な釣り糸、ともに作るのに高い技術を要し、この地方では一般的ではなかったのだろう。

松浦地方には、日本最古の水耕稲作跡とされる菜畑^{なばたけ}遺跡や、女王国に支配される前の三代にわたる「末廬^{まつら}国」王墓とされている宇木汲田^{うきくんでん}遺跡、柏崎^{かしき}遺跡、桜馬場^{さくらのばんば}遺跡など多くの遺跡がある。その三代にわたる遺跡を見てみよう。

宇木汲田^{うきくんでん}遺跡

弥生前期末から中期初頭、唐津市東部鏡山南に大陸系の青銅器を副葬する初期の王墓が出現した。それが宇木汲田^{うきくんでん}遺跡である。この遺跡からは、鏡のほか、多くの銅剣、銅矛、勾玉などが出土し、ここから末廬^{まつら}国における王権が始まったと考えられている。排水溝の工事中に発見された甕棺からは、銅剣二、銅矛二、勾玉二、管玉二十九などが出土し、弥生時代前期から後期の甕棺墓を中心とした墓地であることが判明している。この遺跡の特色は甕棺の副葬品にあり、これまでに細形銅剣・細形銅戈・細形銅矛・多鈕細文鏡^{どうくしろ}・銅釧・管玉・勾玉などが数多く発見されている。また、縄文時代晩期の貝塚も発見され、初期農耕文化の生成を考える上でも学史的に重要な遺跡である。(参考資料 : <http://inoues.net/club/ukikunden.html>)

柏崎^{かしき}遺跡

柏崎には幾つか発掘調査された地点があり、柏崎石崎遺跡からは、我が国でこれまで三例しか出土がないと言われる「触角式有柄銅剣」が出土して注目を浴びた。この銅剣は、西暦紀元前後の中期の甕棺に内蔵されていたもので、騎馬民族スキタイ風の、世界でも数例を数える貴重なものである。柏崎田島遺跡からは「連孤日光銘鏡」という前漢中期の鏡が出土し、日本と中国の関係を示す遺物として、これまた注目を浴びた。これらの特異な出土物から、柏崎遺跡は『魏志倭人伝』に記されている末廬^{まつら}国の王墓に比定され、有柄銅剣は有力部族長の権力を象徴するものとされた。

(参考資料 : <http://inoues.net/club/kasiwazaki.html>)

さくらのぼんば 桜馬場遺跡

桜馬場遺跡は弥生時代中期からAD1世紀あたりの後期の甕棺墓地である。出土した甕棺の棺内から副葬品として、後漢鏡二面、銅釧二十六個、巴形銅器三個、鉄刀片一個、ガラス小玉一個が出土した。その豊富な副葬品から、女王国に支配される前の「末廬国」王墓とされている。また、大陸に起源をもち朝鮮半島から伝来した「支石墓」も複数発見されており、この地方は九州の大陸との玄関口として古くから栄えていたことが窺える。(参考資料：<http://inoues.net/club/sakurababa.html>)

これらの遺跡にみられる大陸との交易の窓口としての華やかな先進性に対して、『魏志倭人伝』のまつら国の記述内容とのギャップはなんだろう。官や鄙守が書かれておらず、漁業を主産業とし、農業が盛んとは思えない記述である。陸路は前が見えないほど荒れていて、周辺諸国との交易ははたしてあったのだろうか、と疑問を覚える。

このギャップの原因は、桜馬場遺跡の後の時代、紀元1世紀ごろまつら国が減んだからであろう。新しい支配者により、大陸との交易の窓口の役割が伊都国に移り、国力が大幅に低下したと思われる。さりとて、これだけの落差の原因は検討を要する。考えられるのは、どのような状況で、どれだけまつら国を見分してこの紀行文が書かれたのか疑問だ、ということである。まつら国は官や鄙守が書かれていないので、帯方郡の役人一行が港の役人との折衝や、接待を受けることもなく、ただ単に寄港しただけで短時間で出港したのではないかと思われる。もしそうであれば、港の周辺の様子以外は見分できなかったであろうから、内陸部の様子がわからず、沿岸部の様子だけしか書かれていない、このような紀行文になったのだろう。

原文「東南陸行五百里、到伊都國。官曰爾支、副曰泄謨觚・柄渠觚。有千餘戸。世有王、皆統屬女王國。郡使往來常所駐」

訳「東南に陸行し、五百里で伊都国に到着する。長官は爾支、副官は泄謨觚と柄渠觚。千余戸が有る。世々、王が居る。皆、女王国に属する。帯方郡の使者の往来では常に駐在する所。」

陸上を東南に行くと、五百里でいと国に到着する。いと国は現在の福岡県糸島市と思われるが、ここも方向がおかしく、東南ではなく、東、もしくは東北東である。まつら国からいと国へは、それぞれの比定地が松浦地方と糸島市ならば、陸路よりも海路の方が便利で速い。陸路としたのは「東南に行く」と書いたため、九州を南下するものとして、その偽りに合わせたのだろう。また、まつら国の記事は、沿岸部の状況しか記載がなく、平野部にあったはずの田畑や集落については何も書かれていない。稲作先進地であるまつら国の記事としては異様で、とても東南へ陸行したとは思えない内容である。つまり、『魏志倭人伝』のまつら国の記述内容は方角が改竄されたものだということの傍証になっている。

いと国の副官は「せもこ」と「へくこ」の二名となっており、鄙守と書かれていない。二人が軍人の可能性もあるが、「帯方郡の使者の往来では常に駐在する所」であるという重要性からみても女王国の高官が駐在していたのであろう。鄙守がいたとしたら二人よりも地位は下になる。また、数代にわたって王がいるが、ずっと女王国に属しているので、数代前に女王国と和睦を結んだか、降伏したのだろう。千余戸があると書かれているが、「翰苑」注所引「魏略」には「万戸余」とあり、千余戸では末廬国や奴国と比較すると少なすぎ、「魏略」の「万戸余」が正しいのではないかと思われる。いと国は和国の大陸への表玄関として重要な役割を負っていた。

伊都国の遺跡の状況

三雲南小路遺跡

この時代の糸島市の遺跡には、三雲南小路遺跡がある。三雲南小路遺跡は江戸時代の文政5年に発見された。発見当時の様子を記録した『柳園古器略考』（青柳種信著）には、甕棺の大きさは「深三尺餘、腹經二尺許」であり、高さが90センチメートル以上、胴の直径が60センチメートルほどもある巨大な

もので、その巨大な甕棺が2つ、口を合わせて埋められていた（1号甕棺）と書かれている。中からは銅鏡三十五面、銅矛二本、勾玉一個、管玉一個、ガラスの璧八枚、金銅製の金具などが出土している。これらの出土品は殆どが現残していないが、わずかに銅鏡一面と銅剣一本が博多の聖福寺に伝えられており、国の重要文化財に指定されている。出土した甕棺からこの墓は弥生時代の中期後半に造られたものと考えられる。

最初の発見から150年後の昭和50年、福岡県教育委員会によって発掘調査が行われ、新たに2号甕棺が発見された。2号甕棺も、高さ120センチメートル、胴の直径が90センチメートルの巨大な甕棺2つを口を合わせて埋めたもので、盗掘されていた。副葬品として銅鏡二十二面以上、碧玉製の勾玉一個、ガラス製の勾玉一個、ガラス製の管玉二個、ガラス製の垂飾一個などが出土している。また、1号甕棺の破片や副葬品の銅鏡の破片多数、ガラス製の璧も出土し、新たに金銅製の四葉座飾金具が出土した。銅鏡はすべて中国製で、1号棺、2号棺からの前漢鏡を合わせると六十面近く出土している。この時の調査では、二基の甕棺のまわりを取り囲むと考えられる溝（周溝）の一部も発見されており、甕棺は墳丘の中に埋葬されたと考えられる。墳丘は東西32メートル×南北22メートルの長方形をしていたと推定され、弥生時代の墓としては巨大なものである。墳丘内には他に墓が無いので、この巨大な墳丘は二基の甕棺の埋葬のために造られたものと考えられる。また、副葬品の内容から、ここは王と王妃の墓であろうとされている。

井原鍵溝遺跡

三雲南小路遺跡の南端の所に井原鍵溝遺跡（推定地）があり、後漢鏡が二十面くらい出土しているが、天明年間に発見されたため、このとき発見された出土品は現存しない。この遺跡は、末廬国の桜馬場遺跡（唐津市）とほぼ同時代と見られている。そして、その後の時期の王墓とされるのが、^{ひらぼる}平原遺跡である。

平原遺跡

平原遺跡は、それまでの甕棺墓でなく、東西18メートル、南北14メートルの長方形の方形周溝墓で、弥生時代から古墳時代にかけての遺構であるとされた。遺構の中央部には、割竹形木棺を収めていたと思われる痕跡もあった。この遺跡からは、破碎された合計四十面分の鏡、ガラス・メノウなどの装身具、素環頭太刀等が出土し、鏡の枚数は一墳墓からの出土数としては我が国最多であった。また、復元された内行花文鏡は直径が46.5センチメートルもあり、これまた我が国では最大径の鏡であった。方格規矩鏡、内行花文鏡の組み合わせから、後漢中期の組み合わせだろうとされ、それは邪馬台国の時代に相当する。また、これ以前の鏡は破碎されて出土する例がなく、鏡の副葬の方法が変わったことを示している。墓の様式についても、それまでの甕棺墓が廃され、方形周溝墓が変わった。伊都国の王墓は、三雲、井原、平原と変遷して行くというのが定説だが、卑弥呼出現の2世紀終わりには、平原が伊都国の王都だったということになる。そして倭人伝にいう「世々、王が居る。皆、女王国に属する。」という記事とも合致している。

（三雲南小路遺跡、三雲南小路遺跡、平原遺跡とも参考資料：<http://inoues.net/ruins/mikumoshouji.html>、<http://inoues.net/ruins/itokoku.html>）

原文「東南至奴國百里。官曰兕馬觚、副曰卑奴母離。有二萬餘戸」

訳「東南に百里進むと奴国に至る。長官は^な兕馬觚、副官は^{しまこ}卑奴母離。二万余戸が有る。」

な国は大和時代の^{なのあがた}灘県、現在の春日市を中心とする福岡平野一帯に存在したと推定されている。福岡平野一帯なら方角は南東ではなく、東である。長官はしまこという名前、副官は鄙守。王の記載はなく、女王国の一地方であった。人口は多く、二万余戸がある。

『後漢書』東夷伝によれば、建武中元2（57）年、後漢の光武帝に倭の奴国が使して、光武帝により、奴国が冊封され金印を授与されたとある。江戸時代に農民が志賀島から金印を発見し、奴国が実在したことが証明された。地中から発掘されたにしては金印の状態が余りに良いために金印偽造説も出たが、

書体の鑑定等から、偽造説については否定的な意見が大勢を占めている。その金印には「漢委奴國王」（かんのわのなのこくおう）と刻まれていた。刻まれている字は「委」であり、「倭」ではないが、委は倭の人偏を減筆により省略したもので、倭を意味する。（参考資料：ウィキペディア「奴国」）

金印の「漢委奴國王」の読み方については、倭奴国を「倭の奴国」と読むのか「わなこく」と読むのか定説がない。しかし私は「倭の奴国」が正しいと思う。中国からみて辺境の地の国々を書き表すとき、「倭の」とか「韓の」などの、いわば形容詞的な冠詞を付けないと、どのあたりの国なのかわからないからである。もし、「わなこく」に漢字を充てたのなら、「わ」には「倭」以外の文字が充てられ、べつに「倭の」「わなこく」と、形容詞的な記載がなされたはずである。『三国志』魏書弁辰伝に書かれている国名を見ると、弁辰弥離弥凍国、弁辰接塗国、弁辰古資弥凍国、弁辰古淳是国などと、頭に「弁辰」を冠して表示していることがその根拠である。

この時代までに奴国は戦争に敗れ、金印は^{なのあがた}隼 県 から離れた志賀島に隠匿され、王のいない属国とされて、名前だけが残ったのだ。

なお、この金印は福岡市博物館に保管されており、一般の人も見ることができる。

奴国の遺跡の状況

須玖岡本遺跡

春日市では多数の弥生時代の遺跡が発見されており、中でも須玖岡本遺跡は南北2キロメートル、東西1キロメートルの範囲の弥生時代中期から後期の大規模な遺跡群である。その中の巨石下甕棺墓からは三十二面以上の後漢鏡、銅剣、銅矛、玉類などが出土しているが、明治期に発見されたもので、今現在、遺物は散逸していて、正確な数は不明である。通説では、埋葬者は金印を授けられた王よりも以前の王であろう、といわれている。（参考資料：ウィキペディア「須玖岡本遺跡」）

弥生時代後期、大陸との窓口であった伊都国の東に位置する奴国は、須玖岡本遺跡以外にも多くの遺跡があり、須玖永田^{えいだ}A遺跡、駿河A遺跡、柏田遺跡、門田遺跡^{もんてん}など、青銅器や鉄器、ガラス製品の工房なども出土し、永く栄えていたことが窺える。

原文「東行至不彌國百里。官曰多模、副曰卑奴母離。有千餘家」

訳「東へ百里行くと、不^ふ彌^み國に至る。長官は多^た模^も、副官は卑^ひ奴^な母^も離^り。千余の家族が有る。」

ふみ国は地名の類似から福岡市の東にある福岡県宇美町と一般的には比定されているが、諸説ある。長官はたも、副官は鄙守。王の記載はなく、和国の一地方であった。千余の家族がある。

比定地が定まっていないので、ふみ国と思われる地域の弥生時代の遺跡は当然ながら、紹介できない。次のとま国も同様である。

原文「南至投馬國、水行二十日。官曰彌彌、副曰彌彌那利。可五萬餘戸」

訳「南へ水行二十日で、投^と馬^ま國に至る。長官は彌^み彌^み、副官は彌^み彌^み那^な利^りである。推計五万戸余。」

南へ海路二十日だとま国に至る、と書かれているが、ふみ国に比定されている現在の宇美町は海に面しておらず、(当時もっと広く、海岸のあるあたりまでが領地だったのかもしれないが)海路の起点はふみ国とは思えない。であれば、ふみ国は比定地の宇美町ではなく、な国から半径百里の円内の海に面したどこか、ということになるが、今のところ私には候補地はない。

とま国についても比定地が諸説あり、邪馬台国九州説では日向国都萬(現西都市妻地区)説、薩摩国説、五島列島説、等がある。瀬戸内海航行説の場合、名称の類似から備後国の鞆とする説等があり、日本海航行説では出雲国や丹後国、但馬国等に於ける説がある。(参考資料：ウィキペディア「投馬国」)

とま国の長官はみみ、副官はみみなりであり、副官は鄙守と書かれていない。鄙守と書かれていなくても、みみなりという名前の鄙守だったと考えることができるし、女王国に近いため鄙守がおかれていなかったと考えることもできる。これについては、結論付けるための根拠、資料がない。ただ、人口は多く、推計五万戸はこれまでの国々の中で一番多い。とま国は女王国の都に近いところに位置していた比較的大規模な国と考えることができる。

原文「南至邪馬壹國、女王之所都、水行十日、陸行一月。官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮。可七萬餘戸」

訳「南に水行十日または陸行一月で女王の都のある邪馬壹国に至る。官に伊支馬、次に彌馬升、次に彌馬獲支、次に奴佳鞮があり、推計七万余戸。」

帯方郡から女王国の都に至る経路の最後は、とま国から南に水行十日または陸行一月で邪馬壹国に着く。方角はここもあてにならない。官に上位から順に、いきま、みまと、みまわき、なけてがいる。邪馬壹国は推計七万戸余で一番規模が大きい。

なお、「邪馬壹国」の国名は、『魏志倭人伝』ではこの一カ所に見られるだけで、他はすべて「女王国」と書かれている。その理由は、「邪馬壹国」が女王国の首都の名称であり、女王国そのものの名称ではないためである。『魏志倭人伝』には女王国の正式名称が書かれていない。「和国」は日本列島の総称であり、女王国そのものではない。女王国には正式名称がないのだ。中世の戦国時代においても、戦国大名は「天下を取る」ことを目指し、「甲斐の武田信玄」「美濃の斎藤道三」のように領国の名称を冠して名乗っても、征服した領地全体に対して「〇〇の国」のような総称は付けていない。古代においてもそうであったのだろう。

また、邪馬壹国の国名であるが、邪馬壹国の「壹」の字は誤字ではないかという意見がある。それは、現存する『三国志(『魏志倭人伝』)』の版本では「邪馬壹國」と書かれているが、宋代の『太平御覧』は成書が十世紀で現存の『三国志』写本より古いけれど、『三国志』を引用した箇所をみると「邪馬臺国」の表記が用いられて、「壹」と「臺」の二種類の文字が見られるからである。

また、日本では、今日、多くの書物が「壹」や「臺」に替えて「邪馬台国」と「台」を代用している。そのため、さらに話がややこしくなってしまった。

我が国で「邪馬壹国」を「やまたいこく」と読んだのは新井白石が始めとされ、以後それが広まった。(参考資料：ウィキペディア「邪馬台国」)

それでは、「壹」と「臺」のいずれが正しいのか検討しよう。

「邪馬壹国」は、和人が女王国の首都の名前を発音した音に中国人が漢字を充てたものである。だから、「邪馬壹」は漢字三文字だから三音の言葉である。もし、「やまたいこく」に漢字の当て字をしたのなら「邪馬多伊」国のような四文字になったはずである。「邪馬壹国」の初めの二字は「やま」であるが、三字目は一字一音の原則では「たい」や「だい」とは読まない。また、「やまい」国では地名としておかしいし、相当する地名も見当たらない。

さらに、女王国に滞在していた帯方郡の使者が、『魏志倭人伝』の原稿となった紀行文を書いた時、どのように書いたかという問題がある。当時の漢字の字体は隷書が一般的であり、それを崩した字体が草書となった。南北朝から隋・唐にかけて標準となった書体が隷書を直線的に書いた楷書、それを崩したのが行書であり、この時代には楷書、行書は誕生していない(参考資料：ウィキペディア「漢字」)。もしも、隷書でなく草書に近い崩し字で「邪馬□国」と書いたのなら、□は「壹」とでも「臺」とでも、どちらとも読める文字になっただろう。現在の活字で印刷した「壹」と「臺」でも、読んでいるうちにこんがらがってくる。日常使う用語や、中国の地名、人名、動植物の名前などは、前後の文脈から正しい文字が類推できるが、外国(和国)の国名だとそれができないので、書写した人物が読み間違えた可能性がある。古く

からの日本のことばや地名から考えて、元原稿には「臺」と書かれていた可能性が高い。それを、書写するときにそれに携わった人物が間違えた。もしそうであれば、その読みは、「臺」の音のひとつの「と」となる。「やまと」だ。ほかの音では地名、大和言葉にふさわしいものが見当たらない。よって、これ以後は表記を「邪馬臺国」に変更する。

邪馬臺国がやまと国であるということは、女王国の都が近畿にあったことを表している。しかし早合点しないでほしい。邪馬台国畿内説は「邪馬台国が始めから近畿地方にあった」という説だが、私はその説に組まない。中世の戦国時代、天下を取った徳川家康は江戸に幕府を開いたが、出自は三河の土豪である。江戸で生まれ、西に東に転戦して天下を取ったのではない。信長、秀吉に仕え、力を蓄えていって、仕えていた秀吉から関東の地を与えられたのだ。邪馬臺国についても、やまと国が始めから近畿地方にあったのだとしたら九州までを統一した歴史に無理が生じる。これについては、次章で検討していく。

原文「自女王國以北、其戸數道里可得略載、其餘旁國遠絶、不可得詳。次有斯馬國、次有已百支國、次有伊邪國、次有都支國、次有彌奴國、次有好古都國、次有不呼國、次有姐奴國、次有對蘇國、次有蘇奴國、次有呼邑國、次有華奴蘇奴國、次有鬼國、次有爲吾國、次有鬼奴國、次有邪馬國、次有躬臣國、次有巴利國、次有支惟國、次有烏奴國、次有奴國。此女王境界所盡。其南有狗奴國。男子爲王、其官有狗古智卑狗。不屬女王。自郡至女王國、萬二千餘里。(中略)計其道里當在會稽東治之東。」

訳「女王国より北方にある国々は、其の戸数・道里を略載することが可能だが、其の他の傍国は遠く絶たっていて、詳らかに得ることができない。斯馬国、己百支国、伊邪国、都支国、彌奴国、好古都国、不呼国、姐奴国、對蘇国、蘇奴国、呼邑国、華奴蘇奴国、鬼国、爲吾国、鬼奴国、邪馬国、躬臣国、巴利国、支惟国、烏奴国、奴国。これが女王の境界が尽きる所である。

其の南には狗奴国がある。男子を王と爲し、其の官に狗古智卑狗がある。女王に属せず。帯方郡から女王国に至るには一万二千余里である。(中略)その(倭国の)位置を計ってみると、ちょうど會稽や東治の東にある。」

「女王国」は卑弥呼が治める国全体を表す言葉であり、「女王国より北方にある国々は」の書き方はおかしい。これでは「女王国と国境を接する、女王国に属さない北方にある国々は」の意味になってしまう。正しくは「女王のいる邪馬臺国より北方にある国々は」のはずだ。また、「帯方郡から女王国に至るには」も同様に誤っている。

『魏志倭人伝』で紹介された国は、邪馬臺国と、対馬国など女王国に属し国の概要が記載された7カ国、女王国の境界にあるが詳細がわからないとされた21カ国、女王国に属していない国(狗奴国)、合わせて30カ国が記載されている。それに、朝鮮半島南部に狗邪韓国など和人の国があり、女王国の範囲と境界を概観できる。

詳細がわからないとされた21カ国は所在地だけでなく国名の読み方についても不確定である。また、奴国については伊都国の次に登場しており、ここにも記載されて、なぜか二回記載されている。同じ名前の別の国の可能性もあるが間違っているのかもしれない。一部の国名にルビを振っているが、確定したものではない。これら諸国の位置が定まらないために、邪馬臺国の九州説、畿内説のいずれが正しいかの決め手にならない。論争の原因の一つだ。

この中の「しま国」は志摩、島など、「いわき国」は岩城、岩木、磐城など、「やま国」は山などと、各地に同音の地名、もしくは「～島」「～山」という地名が多くあり、場所の確定ができない。だがこれらの中で「いや国」は四国の中部「祖谷溪」に比定できるのではないかと思う。もしそうであれば、四国の北部は女王国が支配し、南半分は支配が及んでいなかったとすることができる。しかしながら、祖谷溪周辺には弥生時代の遺跡が見られず、証拠となるものがないので断定はできない。

狗奴国は、後ほど「日巫女の外交」で再び出てくる。狗奴国と何年も戦争が続き、それを帯方郡に報告したことから女王国の内政が混乱することになるが、その点で重要な国である。頭の隅にとどめておいてほしい。

また、女王国の境界にある国と邪馬臺国との間にある国については何も書かれていないので、例えば邪馬臺国周囲の国々、水行十日などと書かれた旅程で寄港せずに通過した国々、吉野ヶ里遺跡など各地で発掘されている大きな集落を政治・経済の中心地とする国などが何カ国もあったはずで、女王国構成国はもっと多いのだ。

訳「帯方郡から女王国までの距離は南に一万二千里余りであり、それは魏と争っている呉の会稽や東冶の東海上である。」

ここに『魏志倭人伝』に隠された作者の作意が表れている。

当時の中国の世界観は、儒教の書物『尚書』兎貢篇と『礼記』王制篇に書かれたものが常識であった。そのため実際に和国に派遣された帯方郡の使節の紀行文の方位や距離は常識に合わないものなので疎んじられ、常識に沿った紀行文が創作された。三国志の時代、魏は呉と争い、敵対していた。魏に朝貢している属国の女王国は呉の東海上にあり、魏が北から、女王国が東から呉に攻め込むことができるとした。そのため、帯方郡から邪馬臺国までの経路が意図して南へ南へと捻じ曲げられ、道里も一万二千里余りとされ、現在の福建省や浙江省沖の東海上にあることにされた。こうした和国の位置が帯方郡のはるか遠方にある、という常識は魏の王朝の中にもあった。卑弥呼が魏に朝貢したときの詔書に「汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之忠孝（汝の在る所踰かに遠きも、乃ち使いを遣わして貢献す、これは汝の忠孝である）」とあるように、はるばる遠方から朝貢してきたことを労り、女王卑弥呼を「親魏倭王」と属国の中の最上位に位置付けた。魏にとってもその版図がはるか南方の呉の東海上にまで及ぶことになったことが政治的に大きな成果と認識された。

『魏志倭人伝』の邪馬臺国への改竄された旅程を研究して邪馬臺国が九州にあったのか、近畿地方にあったのか論じても意味がない。邪馬臺国の場所の研究は、『魏志倭人伝』に記された旅程から離れて行わなければならない。

この改竄は、帯方郡から派遣された魏の役人が始めから意図して行ったのではないだろう。その旅程は、当初は紀行文として正しく書かれていたのだろうが、『魏志倭人伝』が書かれるときに、魏を滅ぼして領土を継いだ西晋と、後に西晋に滅ぼされる呉の外交関係が考慮され、このように書き換えられたと思われる。

女王国の民俗、風俗、社会等がそのあといろいろと綴られていくがここでは省略し、今回は女王国の歴史の条から検討を再開する。